

6. 若者へのメッセージ

将来の今治タオルを見据えて、職人・片上義春氏からのメッセージである。

人の真似するな

今も昔も、中小規模の織物業者が世界市場で通用する製品をつくりつづけているイタリアでは、個性を重んじる製品づくりをしている。オリジナリティがあるからこそ、そこに高い付加価値が生まれる。あとは流通の問題を解決すれば、中小規模のタオルメーカーだろうが世界で勝負できる。だからこそ、「人の真似するな」という教育を受けて欲しいと片上氏は願う。

織物に個性を出すにはデザインは要である。しかし、今治でタオルのデザインに携わっている若い世代のなかには、東京でさえ行ったことのない人もいる。「東京は街そのものがデザインじゃろ。画家でもみなフランスへ行くのはなんでかと言うたら、よその品物を見ることがいかに大事かっていうことです。」片上氏が若かりし頃そうだったように、たくさんの刺激的なものを前に五感で感じることは、座学では学べない創造力を養う。それが明日に形になるかもしれないし、10年後かもしれない。しかし、個性的なデザインは個性的なデザイナーからしか生まれない。

戦うなら相手のことを徹底して調べろ

ターゲットとしたい市場についてはとことん調べることも重要である。「たとえば、戦争に行くのに向こうの情報を調べずに行くのは無謀じゃろ。」勝負するからには、徹底して調査をしたうえで戦うのが鉄則である。徹底して調べても不測事態は起こる。しかし、世界市場に進出したいのなら、状況が流動的に変化しても不測事態をな


るべく最小限に抑えて、それに対応できるように準備をしておくべきである。

綿にこだわる必要はない

タオルの原料と言え、綿である。しかし、「綿にこだわることはない。シルクを使ってもええし、麻を使ってもええんじゃないかな。」既成概念を破ったところにイノベーションがある。



原料を 100%綿糸にこだわらず、100%毛糸や 100%絹糸、綿糸 50%絹糸 50%などさまざまな組み合わせで製織されたショール。また、染色工程では草木染めされた糸を使って製織されたショール（左から 2 番目）や製織されたあとにプリントされたショールなど（右端）多種多様の製品が事務所に並び。

片上氏は 30 年ほど前に、デニムのブランドで有名なボブソンを生産していた山尾被服工業（株） にタオル織機でつくった生地を売り込みに行ったことがある。その時はけんもほろろに相手にされなかった。理由は、おそらく斬新すぎたことである。次頁の写真の生地は、当時片上氏がタオル織機でデニム用に製織したものである。タオル織機の潜在能力を発揮した製品と言えるが、当時は時代を先取りしすぎた。デニム生地と言え、青色が既成概念であり、現在もやはり綿製の青い生地を裁断してつくったものがデニムのイメージであろう。しかし、こうした試行錯誤と挑戦と失敗が新たな道を切り開くことを片上氏は若者に伝えたい。

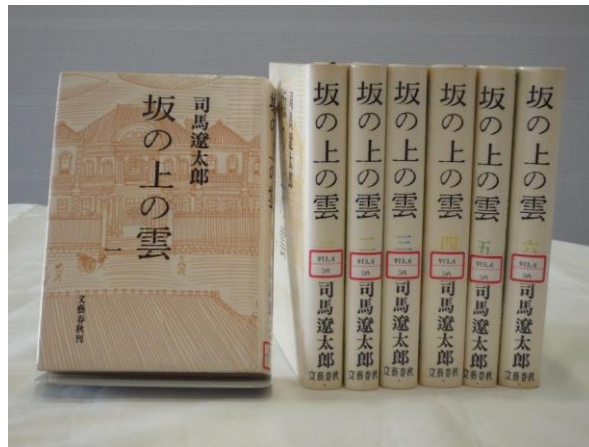


片上氏がタオル織機でつくったデニム用生地

7. 好きな本

片上氏は、歴史小説が好きである。とくに感銘を受けた本は、司馬遼太郎の『坂の上の雲』である。同書は、愛媛県松山市出身の3人の主人公をとおして近代国家の仲間入りを果たした「明治日本」を描いた長編歴史小説である。3人の主人公とは、日露戦争で活躍した秋山好古・真之兄弟と俳句・短歌において革新を起こした正岡子規である。読み進めていくと展開が面白く、その背後にある人間模様が豊かに想像される。また、「歴史に学ぶ」という視点がところどころに表現されていて共感を得る。「秋山兄弟は戦略を立てる際に、戦国時代の戦い方を調べて応用・実践するやろ。タオル業界も歴史に学ばないかん」と片上氏は言う。

体調を悪くしてからはあまり本を読まなくなったが、歴史好きで読書好きの片上氏は、機織りの合間によく本を読んだ。(完)



司馬遼太郎『坂の上の雲』（新装版）1巻～6巻、文藝春秋、2004年、（今治市立図書館所蔵）



参考文献

NPO 法人工房尾道帆布ホームページ

（<https://www.onomichihanpu.jp>）

大成タオル（株）ホームページ（<https://www.onarutowel.com>）

読売新聞「ひこうきぐも」読売新聞大西・菊間 YC 地域情報部、2008年8月7日（第643号）。

編集後記

2019年の「おんまく」も大盛況に終わり、台風8号が四国をかすめた影響でやや涼しくなった8月6日（火）午後2時、織鶴タオル（有）本社事務所で片上義春さんのインタビューが始まりました。

こぢんまりとした事務所は、片上さんが創作してきたタオル生地で溢れており、その種類の多さに目を見張りました。一つひとつよく見ると、そのテ

ザインの凝りように、「これが本当にタオル織機で生み出されたものなのか」とさらに目を見張りました。職人技が光るタオル生地ばかりなのに、乱雑に壁にかけてあったり、事務機の引き出しのなかに何枚も重ねてあったり、棚に積み上げられていたり、「貴重なタオル生地、いや作品だからもっと他人に自慢できるように展示すればいいのに」とおもいました。がしかし、片上さんにとってタオル生地をつくることは日常であり、乱雑に置かれたありさまこそ、40年以上もの間「誰も見たことのないモノづくり」をつづけてきた証しなんだだろうとおもいました。

こんなことを言ったら片上さんは怒るかもしれませんが、「タオルびと」プロジェクトで出会った25人のなかで、間違いなく片上さんが一番のはにかみ屋さんで不器用な人です。言い方を変えれば、モノづくりにあまりにもまっすぐで本物の職人さんです。織鶴タオルは片上さんの代で幕を閉じようとしていますが、織鶴タオルのモットーにあったように、片上さんの作品は多くの人々の日常生活を豊かにし、多くの人を幸せにしていることは間違いありません。

事務所に祀ってある伊予稲荷神社の神様がインタビューをしながら気になっていました。そういえば、以前「タオルびと」でとり上げたミナトタオルの吉田琢磨さんもお稲荷さんを祀っていたな、とふとそんなことを思い出しながら、事務所の片隅に鎮座するお稲荷さんをインタビュー中にチラ見していました。たくさんのご利益のあるお稲荷さんですが、片上さんと吉田さんの事例から推すと、「タオルびと」の神様でもあるのかな。今日も明日も明後日も、職人・片上さんのモノづくりを静かに見守っています。（辻）

事務所に祀ってある伊予稲荷神社の神様



次回の「タオルびと」

「タオルびと」の27人目は、タオルづくりの準備工程において重要な工程のひとつである、へ通し・糸巻き職人の藪内澄子氏である。80歳を超える現在でも、藪内氏の仕事の正確さとスピードは若い世代には負けない。長い期間にわたって今治タオルの発展を陰ながら支えてきた藪内氏に、タオル人生を語っていただく。

